

山口県立美術館ニュース

天花

TENGE

第67号

平成8年12月1日
発行山口県立美術館



作者不詳「江山秋色図」

表紙作品解説

作者不詳

江山秋色図

室町時代

紙本墨画淡彩金泥・掛幅装 56.8×27.1

古拙な趣のある山水図である。画面は前・中・後景の三段に分かれる単純な構成をとり、それぞれの間は大きな余白で距てられている。最前列中央の屋根のある橋が目をはくが、そこには一人の高士がおり、右手には屈曲する大きな松樹がある。中景は霞のなかに沈む建物三棟、樹叢とともに配される。後景は垂直にそびえる主山である。

画面はほとんど墨のみで構成され、一部わずかに淡彩を施している。また、余白部分には淡い金泥の霞をかけていて注目されるが、これには後補の可能性もある。

画面左上の詩は秋の水辺の景を詠み、この小さな山水図の描き出す季節を知らせてくれる。丸岡宗男氏の教示によれば、この詩を書いたのは臨済宗大應派の禅僧無因宗因。とすれば、この山水図の制作年代の下限は、無因の示寂した応永一七年（一四一〇）となる。

無因は尾張の人。建仁寺の可翁宗然に就いて薙髪。のち妙心寺に藉を移し、応安四年（一三七一）授翁宗弼より印可を受けた。のち波多野氏の退蔵院を開いて入院。西宮の海清寺を開創後、大内義弘の外護する河内観音寺、大内政弘の外護する京都円福寺を歴住。応永六年（一三九九）応永の乱が勃発して、大内方の妙心寺が取り潰されたため、妙心寺に帰ることはできなかつた。応永一七年（一四一〇）海清寺に八五歳で示寂。のち興文圓慧禅師の諡号を受けた。

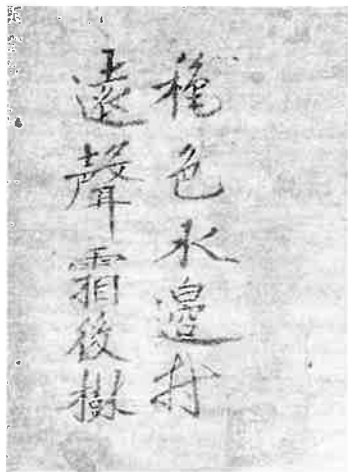
図上の筆跡を無因の数少ない墨跡と照合すれば、いくつかの文字によく似た性格が指摘できる。絵の制作年代も応永年

間後半に活躍期をおく周文よりもさかのぼる印象があり、詩が無因の筆としても矛盾はないように思われる。

いわゆる伝周文の詩画軸の整った作柄とは異なる古拙さは、主山にみられる未成熟な皴法、前・中・後景の一体感のない構成などに顕著である。伝周文作品と同じく、作画の基本を夏珪ら南宋の画家たちの作品に置くことは、前景の橋や松樹から直ちに了解されるが、本図にのちの伝周文画ほど夏珪画を咀嚼し、整理したあととみられない。ただ部分部分に「水色鬚光図」の主山、「江天遠意図」（根津美術館蔵）の前景などと共通するものが感じられ、本図の作者が周文系の先駆的位置にいた可能性を示唆する。

この時期までに成立したことが確実な詩画軸山水図は極めて少ない。如拙筆「瓢鮎図」（退蔵院蔵）「芭蕉夜雨図」（柴門新月図）（藤田美術館蔵）くらいのものであり、本図はそのいずれとも異なる特徴を備えているようにみえる。比較作例の乏しさは如何ともし難く、本図の作者を推定することは現時点では困難である。

山下裕二氏が指摘される「夏珪と室町水墨画」『日本美術史の水脈』ペリカン社 一九九三年六月）相府が蔵していた夏珪筆山水図巻の室町水墨画における強い規範性は、この作品においても確認される。前景の橋がまさにそれである。「溪山清遠図巻」（台北・故宮博物院蔵）以下いくつかの長巻形式の山水図に頻出するこのモチーフは、本図の作者が例の夏珪の図巻からモチーフを借用できる立場にいたことを示唆する。それはおそらく將軍家に近い位置である。阿弥派もし



くは如拙・周文ら相国寺画壇の周辺に本図の作者はいたのかも知れない。

（福島恒徳 専門研究員）

詩文（左より）

「遠聲看後樹

種色水邊村」

「□□」（白文方印）



明治日本画の新情景展

明治期は、維新以後四四年という長期間を通じて、日本という国が近代国家として形を整える上で、急速な変革をめぐらした時期であった。ただその変革の過程も、大まかにみると、あらゆる新しい概念や形式が生まれながらも、それらが未分化のまま混沌とした状況のなかで、その新たな体制を形成することをめざした前期、中期(明治初年〜二〇年代頃)と、それらの体制や制度が定着、浸透し、その一方で新たな展開や対立、矛盾を生じてきた後期(明治三〇年代頃以降)とに分けられるようである。

とりわけ明治後期は、明治美術の諸相を考える上でも大きな転換点ともいえる時期である。「西洋画」に対する「日本画」という概念が、社会通念として確立されはじめ、その「日本画家」という独立した意識をもった画家たちが、画壇の中枢で活躍しはじめるのもこの時期であった。こうしたなか、かれらは西洋の絵画技法や美術思潮に接点をもちながらも、新しい時代の絵画としての新たなモチーフの模索を試み、近代における「日本画」の多彩な様相を形づくっていった。

このたびの展覧会では、この明治後期(明治三〇年以降から大正初年頃まで)に焦点をあて、この時期に小さな研究会などに集った若き日本画家たちの軌跡をふりかえることをめざした。また、とくにごここでは、かれらの活動を洋画との接点、とくに洋画家浅井忠との関係に注目しながら、明治中期以降に強固に醸成されはじめていく近代的「自然観」を背景として、当時の風景や風俗を主題として描いた「日本画」に焦点を絞って

展示してみたい。そしてそれら自然主義的な作品は、まさに当時の日本美術院などで目ざされた歴史浪漫主義的な作品とは対極にあるものであると同時に、明治後期の「日本画」として全く新しい「情景画」ともいえるものであった。それらの作品のなかに表現される若き日本画家たちの意識や考え方を見つめることによって、明治後期の新「日本画」の成立とその実相を検証してみたい。ではそれぞれの展示セクションにしたがって、その概要を述べてみよう。

浅井忠とその周辺

浅井忠は、安政三年(一八五六)佐倉藩士浅井伊織常明の長男として生まれ、幼くして黒沼槐山という南画系の画家について絵を学んだ。その後明治九年(一八七六)に彰技堂に入塾し、初めて洋画を学ぶようになった浅井は、同じ年、工部美術学校に入り、主任教師フォンタネージに師事した。フォンタネージ帰国後は、我が国洋画界初の美術団体である明治美術会を中心的存在として活躍し、昭和三年(一八九八)には、明治美術会から推されて東京美術学校の教授となった。

その一方で浅井は、日本画にも興味を示し続け、伝統的な山水画以外にもスケッチなどをもとにした、洋画的感覚を生かした日本画を制作したのであった。こうした姿勢は、当時の浅井の多くの若い門下生たちにも受け継がれた。

とりわけ小坂象堂は、浅井の洋画風をしつかり受け継ぎ、その画風を日本画に

も生かした。象堂は、浅井譲りの、いわゆる自然主義的傾向を強く反映させたそれらの作品によって、当時の日本画に確実に新しい側面を切り拓き、若い鋭敏な日本画家たちに強烈な印象を与えたが、わずかに二八歳の若さでこの世を去った。

一方、明治三三年から三五年までのフランス留学を終えた浅井は、京都に移り住み、聖護院洋画研究所を設立し、関西美術院の創設にも関わり、そこでもさらに多くの後進を育て、そのなかには日本画家や工芸家も多く含まれていた。

このセクションでは、浅井忠、小坂象堂の日本画作品とともに、浅井と交渉のあった画家たちの日本画作品も展示した。明治美術会の後輩であり、フランス留学中にも浅井と交渉をもった吉田博、関西美術会会員で関西美術院の創立に参加し、京都で浅井の活動を支えた牧野克次、牧野と同じく関西美術会の中心画家のひとりとして浅井を迎えた山内愚徳の、大阪における後継者となる赤松麟作、関西美術会の初期の出品者である大橋正堯、浅井に洋画を学びながら、自らは逆に浅井に日本画を手ほどきした菊地左馬太郎(素空)らの日本画である。

出品作家

浅井忠(図①)、小坂象堂(図③)、吉田博、牧野克次(図②)、赤松麟作、大橋正堯、菊地素空

東京の動き

ここでは主に、无声会と烏合会というふたつの小団体を取り上げる。



③小坂象堂 野辺 1898年



②牧野克次 軽井沢 1905年



①浅井忠 田植之図 1889年



⑥森田恒友 初夏風景 明治末~大正初



⑤平福百穂 田舎嫁入 1899年



④錦木清方 佃島の秋 1904年

ただこの方向も、明治四〇年代頃から、大きく変化し、特徴的な線條描写と大胆な色彩の平面化が行なわれる裝飾的傾向と、当意即妙な速筆が冴える小画面(平切画)的傾向とが顕著となってきた。

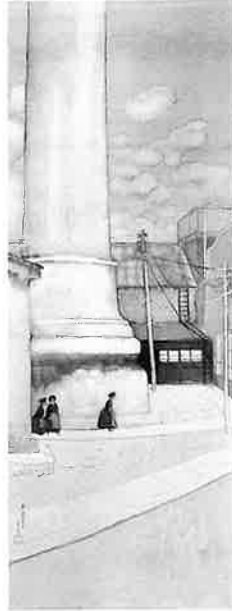
一方鳥合会は、明治三四年(一九〇一)に浮世絵派系統の画家たちが中心となって結成されたが、ここでは独特の江戸趣味を根底としながら、時代に即応した新しい風俗画の確立がめざされた。それらの作風には、やはり自然主義的傾向が反映したものが多く見受けられ、无声会との共通性も多いものの、当時の文学との関わりの深さなどから、より抒情的な側面が強く見られる。また彼らは、写生を重視し、西洋画風を積極的に研究する

无声会は、明治三年(一九一〇)自然主義を標榜して、結城素明、平福百穂、渡辺香涯、福井江亭、島崎柳塙、大森敬堂の六名により結成され、のちに石井柏亭がこれに加わった。すでに小坂象堂の作品などに強く共感していた彼らは、理論面では美術史家大村西崖の支援を受け、思い切った実験作を无声会を舞台に試みたのであった。

ここに現われた自然主義的な表現は、現実を忠実に写し込もうという単なる写真ではなく、ありふれた卑近な題材をもととし、スケッチ的で軽妙な描写の中に、内面からの生命力の発現をめざすものであった。またこうした在り方は、歴史的題材を主とし、ある種の人為的な制作態度により、完結した美を求めようという岡倉天心を中心とした当時の美術院系の画家たちの方向とは、明らかに対極にあったといえる。



⑨松宮芳年 堺の相生橋 1911年



⑧秦輝男 煙突 1911年



⑦戸部隆吉 枇杷と露の臺 1911年



⑪神坂松濤 秋声図 明治後期



⑩千種掃雲 蓮池 1909年

明治三五年（一九〇二）に京都に移り住んだ浅井忠のもとには、早くから洋画を志す若者たちが訪れたが、なかには芝千秋（梅村景山門下）のように、いち早く浅井門下となった日本画家もいた。翌年、聖護院洋画研究所を自宅に開設した浅井は、そこで多くの画家の指導をしたが、ここにも千種掃雲（竹内栖鳳門下）、久保井翠桐（内海吉堂門下）、神坂松濤（菊池芳文門下）、小川千麿（田中一華門下）、杉浦香峰（梅村景山門下）ら若い日本画家たちが学んでいた。また浅井は、彼らが洋画に転ずることを諫め、習得した洋画法を日本画制作に生かすことを勧めたという。

京都の動き

出品作家
福井江亭、島崎柳塙、平福百穂（図⑤）、石井柏亭、森田恒友（図⑥）、岡田秋嶺、戸部隆吉（図⑦）、三浦広洋、小川千麿、戸張孤雁、錦木清方（図④）、鱒崎英朋、大野静方、山村耕花、池田輝方、池田蕉園、吉川靈華、石井天風、上原古年

とともに、多くが挿絵の仕事に関わり、時代の新しい息吹を挿絵に吹き込み、その発展に貢献した。
こうした自然主義的な傾向は、かならずしもこのふたつの小団体に限ったものではなく、ここに展示した石井天風や上原古年などをはじめとして、かなり広汎に、この時代の新しい意識をもった日本画家の作風の中に見出すことができるのである。

こうしたなか、浅井のもとで学ぶ日本画家たちは、丙午画会を結成した。ここでは、洋画のデッサンとスケッチを基調にした日本画が試みられたが、やはりそこには強く自然主義的な作風が生きていた。またこの会には、秦輝男、川畑春翠、奥村泉嶺、海老名長紅など新しい意識を求めた日本画家たちが参加した。

浅井は、京都高等工芸学校で図案絵画を教えたが、すでにヨーロッパ留学時代に工芸や図案には強い興味を抱いていた。京都時代の浅井は、日本画とともに工芸(陶芸、漆芸)や図案に新時代の感覚を發揮した斬新な仕事を残している。そしてこれらの感覚は、浅井が亡くなった明治四〇年末)後も、確実に後継者たちに受け継がれていったのであった。

この頃京都では、ヨーロッパからの新帰朝者が続々と増えるなかで、そのひとりであった田中喜作を中心にして一種の研究懇話会(無名会、明治四二年結成)ができ、そこには千秋、輝男、掃雲、あるいは土田麦僊など多くの日本画家が集まった。また京都市立美術工芸学校を卒業した若い日本画家たちによる研究会(桃花会、明治四三年結成)も組織され、花井抱甕、松宮芳年、平井棟仙、柴原魏象らが参加し、のちに村上華岳、入江波光、星野空外、樫野南陽らが加わっている。

またこれらの動きに平行して、今度は日本画と洋画の青年画家、および批評家による談話会(黒猫会、明治四三年結成)ができたが、これは運営の考え方の違いから分裂解散してしまった。しかしすぐ麦僊や小野竹喬らは、仮面会を結成し

て新たな活動を開始し、これには大阪から北野恒富などの参加もあった。

明治三〇年代後半の自然主義的な作風をもった新しい日本画の流れは、すでに黒猫会や仮面会の頃になってくると、後期印象派や象徴主義の影響を受けながら、やがて非自然主義的な方向へと変っていった。しかしこうした流れの変化こそが、大正初期の新しい日本画の登場の発端となっていたことは重要である。

出品作家

千種掃雲(図⑩)、神坂松濤(図⑪)、芝千秋、津田青楓、秦輝男(図⑧)、海老名長紅、花井抱甕、松宮芳年(図⑨)、神原佳山、柴原魏象、平井棟仙、入江波光、星野空外、樫野南陽、村上華岳、土田麦僊、小野竹喬、北野恒富(図⑫)、小早川秋声

日本画における自然主義的な動きは、

浅井の先駆的な活動に誘発されるように一斉にひとつの新しい時代傾向として開花したといえる。またこの明治三〇年代から四〇年代に入る頃までの日本画における新しい動向は、文学における自然主義の隆盛よりもむしろ若干早いともいえるかもしれない。

しかしこの動きも、明治四〇年代以降には早くも大きく様相が変り始めていた。それは主に、挿絵などの隆盛にも関連をもった即興的な小画面(半切画)作品の流行と、色彩や色面を強調した一種図案的で、装飾的な画面をもった作品の流行というふたつの様相に取って変られたことである。とくに後者は、先に述べたように新しい西洋の美術の動き、たとえば後期印象派や象徴主義などの影響が色濃いと同時に、ある意味ではすでに自然主義の逆の方向性をもつものであった。ところが、これらの側面(挿絵への興

味、画面の図案化への試み)は、浅井自身が生前にすでに積極的に試み始めていたことであった。つまり、浅井自身の内部で、自然主義から非自然主義への交換のきざしが、すでに起こり始めていたのであった。

当時の新しい日本画を求めようというこの一連の軌跡が、西欧からの影響や日本の新しい社会、文芸などの影響を受けながら、自然主義からその全く正反対の非自然主義的傾向へ向かったこと自体、実に面白いことではあるが、同時にこうした流れが大正初期の新しい日本画の動きに直接流れ込みながら、やがて独特な大正期の日本画の様相が形づくられていったこともさきわめて興味深いことと言わなければならない。

(菊屋吉生 当館普及課長)



⑫北野恒富 浴後 1912年

- 会期=12月20日(金)→1月26日(日)
- 開館時間=午前9時→午後4時30分
(入館午後4時まで)
- 休館日=月曜日・12月24日(23日は開館)・12月28日~1月3日
- 入館料=一般720円(610円)／高大生510円(410円)／小中生300円(200円)
()内は20名以上の団体料金

雪舟研究事業

雪舟研究会事務局

山口県立美術館では平成8年度より雪舟研究事業をスタートした。雪舟やその周辺に関する研究者を集めて「雪舟研究会」を組織し、雪舟研究の進展に寄与する活動を行なうとともに、将来構想である雪舟研究所の山口県立美術館内への併設へ向けての準備作業を行なっていく予定である。

本年度は5名の研究委員（山口大学影山純夫・東京国立文化財研究所島尾新・正木美術館高橋範子・岡山県立美術館守安収・明治学院大学山下裕二）を指名し、9月より活動にはいった。事業の概要と研究会設置要項は下記の通り。

〈雪舟研究事業の概要〉

研究委員会会議の開催

年2～3回程度の開催

研究会の運営も含めた雪舟研究に関する業務全般を協議

業務全般を協議

研究報告（研究委員による発表）

講演会・シンポジウムの開催

年1回程度の講演会を開催（研究委員以外の講師）

基調講演ののち、研究委員をパネリストとするシンポジウム形式も可とするシンポジウム形式も可

作品調査

各地に散在する作品のうち重要なもの・緊急な調査が望ましいものを中心に

研究委員・事務局員およびその補助者による調査・撮影

資料収集

文献資料の収集・整理（購入・複写）

写真資料の収集・整理（撮影・購入・複写）

資料収集

文献資料の収集・整理（購入・複写）

写真資料の収集・整理（撮影・購入・複写）

資料収集

研究誌『天開圖畫』の編集・発行
毎年1回発行

研究論文2本程度、資料紹介2本程度・活動報告・文献目録等

内外の東洋美術研究機関を中心に配布

〈雪舟研究会設置要項〉

（設置）

第1条 雪舟及び雪舟に関連する研究

（以下「雪舟研究」という。）を行い、

その拡大と深化を図るため、雪舟研究会

（以下「研究会」という。）を設置する。

（業務）

第2条 研究会は、雪舟研究に関し次に掲げる業務について協議する。

（1）研究会の運営に関すること。

（2）作品研究及び調査に関すること。

（3）資料の収集に関すること。

（4）研究誌の作成及び刊行に関すること。

（5）講演会及びシンポジウムに関すること。

（6）その他関連する事項に関すること。

（組織）

第3条 研究会は、会長及び研究委員若干名をもって組織する。

2 会長は、山口県立美術館長をもって充てる。

3 会長は、会務を総理し、研究会を代表する。

4 研究委員は、雪舟研究に関する学識経験者のうちから会長が指名する。

5 研究委員のうちから委員長を置く。

6 委員長は、研究委員の互選による。

7 委員長は、会議の運営をつかさどる。

（研究委員の任期）

第4条 研究委員の任期は1年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 研究委員は、再任されることができ

（会議）

第5条 研究会の業務を行うため、研究委員による会議を開催する。

2 会議は、必要に応じ会長が招集する。

（事務局）

第6条 研究会の事務を処理するため、山口県立美術館（以下「美術館」という。）に事務局を置く。

2 事務局に事務局長及び事務局員を置く。

3 事務局長は、美術館副館長をもって充てる。

4 事務局員は、美術館職員のうちから会長が指名する。

（その他）

第7条 この要綱に定めるもののほか、研究会の運営について必要な事項は、会長が研究会に諮って定める。

付則
この要綱は、平成8年9月18日から施行する。

（福島恒徳 雪舟研究会事務局）

雪舟研究会 発足に想う

守安 收

はじめに

このたび山口県立美術館を事務局とし、雪舟研究会が発足したことをとても嬉しく受けとめております。そして初年度の研究委員に指名されたことを何よりも光栄に思う反面、山口と同じ雪舟ゆかりの岡山県に生まれ、現在岡山県立美術館に奉職する私としては、率直に「やられたな」という感を抱かざるを得ません。何故なら、私にもう少し構想力や実行力があつたとしたら、この会は岡山が事務局を務め、全国各地の、当然山口の諸氏をも巻き込んで設立することができたかもしれないという他にないからです。とはいえ、私も公務員生活ほぼ二〇年という経験上、こうした文化に関する

研究会―せいぜい単発的に開くだけ、したがってなかなか成果を挙げることができない、しかし継続的に続けることによつて意義を高めることができるという性格の事業―に対して、幾らかでも予算化することの困難さは理解できるところです。先ずは本会設立に尽力された山口県関係者の英断に敬意を払います。と同時に、指名を受けたからにはいくばくかのお返しをせねばと、個人的にはいささかプレッシャーを感じることが事実です。

研究会は平成八年九月、無事スタートしました。が、本会の活動状況によつては雪舟研究の拠点ともいべき「仮称」雪舟研究所」が山口に誕生するか否かにも影響するかもしれません。関係者一同、精一杯頑張つて任期を務め、貢献すべく努力を惜しみません。

なお、この研究会の具体的な事業内容、メンバー構成等については、事務局から別にお知らせがあることと存じます。

岡山での雪舟をめぐる動きこの頃

雪舟研究会の成果は講演会・シンポジウム・研究誌等で後日、発表されることでしょう。ここでは雪舟が生まれた岡山からの寄稿ということで、『天花』読者の皆さんに岡山において最近催された雪舟関連の二つの事柄を紹介してみたいと思います。

一、雪舟サミットの開催

平成八年三月二五日～二六日

於 岡山県後月郡芳井町

雪舟サミットは、雪舟ゆかりの市町村が雪舟の偉業を顕彰しながら相互の交流を深めることを目的としたもので、誕生地である岡山県総社市の呼びかけで始まり、開催地を移しながら今年で第六回を迎えました。参加したのは大分県大野町、福岡県川崎町、総社市、島根県益田市、山口市、そして開催地の芳井町です。今回、本研究会関係では、島尾新による基調講演「雪舟入門」、島尾新・高橋範子・福島恒徳・守安收（以上、研究委員・事務局員）に對本宗訓臨濟宗佛通寺派管長、大島千鶴芳井町歴史民俗資料館学芸員を加えたフォーラム「画聖雪舟の魅力を探る」が行われ、さらに同町資料館にて「重玄寺宝物展」が開かれました。

芳井町と雪舟という組み合わせで、「確か、雪舟が亡くなったといわれている町だったかな」とひらめいた方はあまり多くないのではないのでしょうか。芳井町が根拠としているのは『東福寺誌』中の「永正三年丙寅二月十八日雪舟等楊備中大日（月）山重源（玄）寺に寂す」という記事であり、この大月山重玄寺こそ、現芳井町天神山に所在する佛通寺派の禅寺なのです。ただし、これまでの雪舟研究では『東福寺誌』以外に雪舟と重玄寺との結びつきを裏付ける資料が見当たらず、芳井町で雪舟が死去したとする説は、山口・益田両説より根拠が薄いものとみなされてきました。

ところが、この芳井町には「雪舟を語る会」という会員数八〇人ほどのグループがあり、彼らは単に雪舟について学ぶだけでなく、地域のことを歴史も自然も共に理解しようと自主的に、かつ熱心

に活動を続けてきた経緯があります。そして、語る会のメンバーが、ちょうどこのサミットの直前、きわめて重要な史料を発見しました。その史料とは、重玄寺の開山千畝周竹（せんみょうしゅうちく一三七九年生―一四五九年没）の語録『也足外集』（一七九四年の写本。原本に忠実なものと思われる。）であり、雪舟（一四二〇年生―一五〇六年没）が芳井町で没したか否かについては関係ありませんが、雪舟と千畝とのかかわりをうかがわせるに足るものでした。すなわち、雪舟が芳井町とは決して無縁な存在ではないことを示唆しているのです。私も初めてこの語録の存在を知らされた時は興奮を隠すことができませんでした。ともあれ、内容の具体的な紹介は、本会研究誌において初めてなされる予定です。御期待下さい。

乞御期待といいつつ、私は反省せねばなりません。つまり、これまで語る会のメンバーとは何年もおつきあいしながら重玄寺とのかかわりについてはいままら何も出ないだろう、伝承のひとつとして扱わざるを得ないと積極的に資料さがしをせずに放置していたことです。今回、この語録が世に出てきたのは、地域への伝承を肯定的に受けとめ、粘り強く関係資料の調査に励んできた語る会の存在があつてのことでした。これまで、語る会が必ずしも芳井町内で十分評価されてきたようには思えません。しかし、この度のことで、町民の支持と信頼をかちえたことと確信します。

なお、重玄寺にはこの千畝和尚の頂相が伝来しています。保存状態がきわめて



雪舟筆「倣李唐牧牛図」(山口県立美術館蔵)



雪舟筆「倣玉澗山水図」(岡山県立美術館蔵)

これらの作品は、雪舟が中国の古典的画家の作風にならって制作したもので、もとは12図からなるシリーズであった。のちに分断され、現在は6図が各所に分蔵されている。

雪舟は中国絵画を深く学び、当時の日本において質的に最も中国絵画に近い絵画を制作できる画家であった。そうした雪舟の中国絵画学習の実態を考える上で最も重要な作品群として、6図のいずれれもが重要文化財に指定されている。うち雪舟ゆかりの山口に2図、同じく岡山に1図がある。

岡山県立美術館の作品は玉澗の潑墨山水図を学んだもので、墨だけを使ってその濃淡で山水景観を巧みに表現している(右図)。山口県立美術館の作品は李唐の作品に学んでおり、中国江南の風景とそのどかな気が表現されている(左図)。

雪舟という大画家を冠に戴いたお陰でしようか、熊本・福井を除いた国内すべての都道府県から、さらに中国・ドイツ

悪く、図上の賛文(千畝自筆と推定され、文面は語録に載る)も十分読みとれないため、岡山県立美術館で赤外線写真を撮影して判読したほどですが、制作時期は室町時代であることについては間違いないようです。本作品についても、地元だけで知られていたものですから、やはり紹介に値するでしょう。

二・雪舟の里総社墨彩画公募展

主催 岡山県総社市・総社市教育委員会

審査日 平成八年七月七日

入選作品展

総社会場 八月二八日～九月八日

岡山会場 九月一日～九月一六日

総社市は前述したとおり雪舟の生誕地です。同市で雪舟顕彰事業の一環として水墨画の公募展が企画されたのは随分以前のことでしたが、実現までには紆余曲折があり、計画が具体化したのは二年前でした。それも水墨画に限定した場合、質的に、また量的にも充実した作品を確保することが困難ではないかとの意見が出て、最終的には墨彩画として公募することになりました。この墨彩画という用語の定義自体、容易ではないわけですが、広義に解釈し、墨線・墨色・墨調の良さが発揮されていれば認めようという結論に達しました。そして審査員には平山郁夫、上村淳之氏ら知名度の高い方々を迎え、募集に踏み切ったのです。

などからも作品は届き、総数一〇二〇点という予想をはるかに超えた応募がありました。審査当日には雪舟大賞一点(三〇〇万円)、審査員特別賞一点(二〇〇万円)、特選三点(一点一〇〇万円)(以上買い上げ)、奨励賞五点(一点二〇万円)、入選三〇点(記念品)が決定し、あわせてレベルが高いということで、予定外ではありましたが佳作三三点も選出することができました。買い上げ金額にふさわしい作品が来るだろうかという当初の心配は全くの杞憂におわり、総社・岡山の二カ所で開かれた入選作品展も大盛況でした。市民にも雪舟の生誕地をアピールできたこと好評のようで、二年あるいは三年ごとに恒例化したいと話題になっています。

また、この公募展が企画会社や広告代理店の主導で行われたのではなく、むしろそうしたところを排除しつつ教育委員会が中心になって努力した点も高く評価できるところです。

雪舟没後五〇〇年を一〇年後に控えた今、雪舟を語る会の活動や墨彩画公募展開催をはじめとして、これまで動きの鈍かった岡山でも雪舟の偉業と足跡を見つめ直し、さらに町おこしにまでつなげようと試みられる状況が生じてきました。山口レベルに及ぶことは難しくても、岡山でも上滑りせず、地域に密着した活動ができるよう私もお手伝いをしていきたいと考えています。

(岡山県立美術館主任学芸員)

『天開圖畫』

高橋範子

が記すように、同誌第十七集には既に中島筑水による「松月庵主徹書記事項」が載り、清嚴正徹と博多との関係が論じられている。室町時代、一四〇〇年代前半期を著名な和歌の歌詠みとして活躍した東福寺の書記・清嚴正徹（一三八一—一四五九）は、京の禅林社会でのその異質な在り方において後世の歴史家達の論評の対象となり続けた。

机上に、「清嚴正徹と雪舟等楊」と題された古い論考のコピーがある。『筑紫史談』第五十一集に収録されるこの原稿を、井上蘭崖は昭和五年十一月二十八日に完了している。七十年近くの歳月が流れた。

※

『筑紫史談』はその名が語るように筑前、筑後の歴史を論究し語り伝えることが主眼とした有力な地方史誌であったことが考えられる。清嚴正徹は、六十代半ばに九州行脚を志して博多承天寺に寄寓し、その地周辺に歌人にふさわしい伝承を遺すことから当地ゆかりの人物として『筑紫史談』に迎え入れられた。井上蘭崖

初めより病に染まり起き得なかつた」正徹が二日前の「九日に逝」く。「享年七十九」とある。井上蘭崖は、その清嚴正徹の出自に注目した。

「俗姓は小田氏にして備中の産、小田上総守の舍弟なり」。清嚴正徹は備中国小田郡小田庄神戸山城主の家系の出であった。正徹のこの在俗時代の系族の記録に、井上蘭崖は同じく室町の時世を絵筆で生きぬいた画僧・雪舟等楊（一四二〇—一五〇六）その人の出自を想起したのだ。「備中国赤浜の生誕、藤原氏の流れにして俗姓小田氏」。蘭崖の論考は、雪舟の出自である備中の藤原姓小田氏の検討に向かった。「正徹の家系である小田氏は備中ではあるものの姓は紀氏だ。雪舟は正徹の家系に直結しない。しかし雪舟の出自という藤原姓小田氏というのは確かに存在する。でもダメだ、常陸小田氏だ。備中に縁故もなさそうだ」。蘭崖には備中小田氏に藤原姓を探しあてて手だては、これ以上無かった。しかしながら彼は、正徹と雪舟の接近する生涯の時期と、京五山禅林を舞台にかたや歌道を以って、また、かたや絵筆を以って特異に我が道を貫いたこの二人の非常に近似する禅僧としての在り方に、執拗な関心を示し続けた。そして両者に、決して無縁では有り得ないであろう一脈のつながりを見い出そうとした。たとえば、正徹の直系血族関係者が赤浜の地に分立した家系から雪舟が出たという説明はどうか。井上蘭崖は、六十六年の歳月を遡るあの日に、自らの熱い信念を込めて「清嚴正徹と雪舟等楊」を書き終えた。蘭崖はその中で、正徹と雪舟を同じ郷国の同

血族から出たわが中世禅林の「二英俊」と位置づけ、以後の研究の方向性を示し遺した。

※

井上蘭崖は論考「清嚴正徹と雪舟等楊」の中に、清嚴正徹と山口の大内氏との関係を示す記事を引用し、収めている。康正二年（一四五六）、周防の大内教弘は清嚴正徹に始めての状を送る。「西国物詣思立て下向あるべし、其に因て来りて歌道の事、庭訓に加えるべし」。正徹の歌道精神に接さんと、周防へと招いた。大内氏二十八代にあたる大内教弘は彼自身、歌道に通じた武人であった。兵部卿師成親王に和歌を学び、連歌もよくした教弘は『新撰菟玖波集』の作者に列している。その年、正徹は七十六歳。「至極の老屈なり、むかしの事は今は隔世則忘のごとし」と丁重に招請を拒んでいる。小京都の名にふさわしく山口の地は、今も暮れゆく夕闇に瑠璃光寺の五重塔が伸びやかに浮かびあがり、京の地の抒情そのままを体得させる。大内氏歴代が絶え間なく情熱をつぎ込んだ文化の理想郷が、その地には尚、息づいている。雪舟の山口天花の地の画房、雲谷庵跡にたたずむ時、瑠璃光寺の塔が真正面に優美な姿をみせる。雪舟は山口の地で、また大内氏のもので、室町の世を絵筆に生きることを許された。

※

昭和三年七月の武井男爵家売立目録に、

雪舟と大内文化のつながりを再認識させる一幅の雪舟画(図①)が載る。「雪舟破墨山水横物 原冲賛 表装一風紫地印金 縦九寸八分 巾一尺三寸八分」。横幅の小さな掛物である。にわかには異和を感じる画中ではあった。



①伝雪舟 山水図

絵には「北野原冲」の詩が寄せられる。十五世紀前半期、京の五山禅林文化を多彩に演出した高僧のひとり謙巖原冲である。京の北野に地縁のある人なのか、「北野」を掲げる。法を、東福寺にその名を誇る学僧虎関師錬の弟子・日田利涉に嗣ぎ、伊勢の安国寺、駿河の清見寺と諸山、十刹を歴住する。その後、応永十七年(一四一〇)には東福寺第七十九世に昇住、また、応永十九年(一四一二)には天竜

寺第五十一世に遷住、と京五山長老への道を歩んだ。その履歴は、原冲の示寂を応永二十八年(一四二二)九月二十一日と記録した。雪舟はその前年にあたる応永二十七年に生まれたばかりだ。謙巖原冲が雪舟画に直に賛詩を書きすることはできない。この図はいかにして作られたものなのか。原冲の詩と書を見つめてみた。どことなく懐かしい雰囲気伝わってくる。

行舟未決是耶非先置菟堂
 傍翠微短首問山蒼曰霞
 途雅樂不心何北野原冲

③山莊図(部分)

行舟未決是耶非先置菟堂
 傍翠微短首問山蒼曰霞
 途雅樂不心何北野原冲

賢守甘澗別置菟山青雲白
 我封疆苑深邊說亂劇一
 香不帝後豈長 望深

四塞休傳前三軍正緝鞞難
 雙髻雪進還寸心舟白今知水
 青山泥寄安猶悲風昨夜上對
 茶散 河東真玄

逸禪知有夜雲樹一山傍野
 岩春碧翠憐僧以對林松門
 長不願茶窠自曲苦治靜慈性
 節清石宜江陽 海南忠雅

雄才今正釋無雙何事未輔
 駐海邦遼郡青山真如玉可
 臥一日不臨窓 北西 見柏

中原草木散 君名一叙九州
 箱罈橫史掃林堂唯坐嘗翠籠
 海色耶山清 若溪性明

使君處幽事別館傍煙霞
 應似朝川宅豈同金谷奢
 吟賦樽有係談笑髯無華
 編想山奇終投詩魄不佳
 天府周鼎

②山莊図(正木美術館蔵)

何故だ。そして私は、一幅の名画を思い出した。今、正木美術館に伝わる、謙巖原冲が京五山に名を馳せていた応永年間(一四二二)の詩画軸の優品「山莊図」(図②)である。「山莊図」は、当時の京五山における名だたる文筆僧九名から、山口の守護大名・大内盛見に贈られた祝賀の一軸である。先述の清巖正徹に書状を出した大内教弘は、盛見の子息だ。大内氏二十六代にあたる父の盛見は京文化に深く憧れた。そして自ら、五山禅林の文雅の場に参画し活躍した。

親しい文雅仲間の大内公がかの地山口に別邸を新築し、このたび完成を迎えたとき。さて我々は、この京の地より祝いの軸でも届けてみようではないか。それぞれの賛詩の中に、本図の制作の動機は明らかにされる。画家は紙面下方左片隅に、清雅で静寂な書齋の水景色を描いた。そして詩を寄せる僧達は、画景にまだ見ぬ大内別邸の趣きを想起し、邸の主・盛見の武人としての偉業と風雅の人となりを称賛した。時期としては大内盛見が周防、長門の守護職を安堵され、九州経営を任された応永十一年(一四〇四)頃かと考えられている。「中原の草木君の名を識る」と若溪桂明は、遠く都の草木ささえ識る盛見の名声を記す。また、「使君 幽事を愛し、別館 煙霞に傍う。応に朝川の宅に似るべし」。巖中周鼎は盛見別邸に唐代の詩人・王維の別荘地「輞川」を重ねあわせた。そして画の上方、最上段の冒頭に「北野原冲」の詩と書(図③)がみえる。

矯首問山々 答日 窪途雖樂不如帰

北野原冲 白文方印「謙岳」

武井男爵家の売立目録の雪舟画に寄せられた謙巖原冲の賛詩は、まったく「山莊図」に寄せた謙巖原冲のそれと同一の、しかも筆跡の書体まで同趣のものであったのだ。売立目録に収録の雪舟画に初見で感じた懐かしさは、この「山莊図」の存在に起因した。

売立目録の「雪舟画」は、そこに記された賛詩が他ならぬ山口の大内氏ゆかりの「山莊図」から引用されたものであることよって、激しい興味の対象となる。この「雪舟画」は、作品の真贋以前に、雪舟その人と大内氏、また、山口の地そのものとの歴史的な関係の深さを改めて痛感させる。

いつの時代の者かはわからない、だが謙巖原冲の詩を京五山の長老をきどり筆を握った或る者は、確かに「山莊図」を知っていた。詩の内容も熟知していたものとみえる。画中の楼閣を「苜堂（かやぶきの家）」とは詩に詠まない。苜堂の二字だけは「山閣」と変えられた。その山閣こそが、この「雪舟画」に雪舟画らしさを与える唯一のモチーフであることを或る者は知っていたのか。

こうした「雪舟画」が作られた背景そのものに、大いなる関心があるのだ。後世の粉本や売立目録に具体的にその図柄を確かめ得る「雪舟画」の検討は今後、重要な雪舟研究の課題となることが考えられる。歴史の中で複雑にからみあった「雪舟画」の虚構の糸を一方所すつ、そして一本ずつ解さほぐしながら、隠され

ている雪舟の真実をあかしてみたいのだ。

※

応仁の大乱を境に激しい価値観の変動と社会構造の変貌を遂げた室町の世で、京より山口へと下り移った雪舟は、当地で何を思い、何を自らの人生の事柄として成したいと願ったか。

大内氏関連の史料に雪舟の記録を未だ指摘することはできないと聞く。山口の地で大内氏が雪舟の絵筆に求めたものと雪舟画の出した答えは一致していたか。また、東遊と記される雪舟の旅に我々はいかなる意義を見いだすべきか。西行や宗祇、芭蕉の旅とそれはいかに違うか。あるいは、西洋の中世における吟遊詩人の旅の在り方とはどうだ。私の中だけでも無数に沸き起こる雪舟研究の課題がある。

「私は雪舟をこう思う、といった論文ではなく、後世に遺され検討され続けるような資料を提供する、そんな論考を集積する論集にしよう」。山口県の雪舟研究会・第一回研究会で、研究紀要の在り方を討議した際のY氏の発言である。彼の言葉は熱かった。

紀要の名称は『天開圖畫』と決まった。雪舟の大部分在住時の画室名、天開図画楼にちなむ。紀要第一号の内容も定まった。その中には、雪舟の出自に関する一史料が提出されるときく。『筑紫史談』の井上蘭崖の論考に、我々の世代はどのような答えを出すことができるのだろうか。七十年のちの世までも誇らしく、そして熱く生き続け、研究紀要『天開圖畫』よ。

(正木美術館学芸員)

美術館から

これからの展覧会

明治日本画の最新情景展

二月二〇日～二月二六日

二紀展 二月一日～二月九日

山口大学卒業制作展

二月一三日～二月一六日

山口芸術短期大学卒業制作展

二月二〇日～二月二三日

ウーライ展 三月四日～三月三十一日

これからの常設展

●第一常設展示室

絵画展示室（香月泰男室）

シベリア・シリーズⅢ

二月一日～二月二日

シベリア・シリーズⅣ

二月四日～

絵画展示室（小林和作室）

戦後日本画の変革

二月一日～二月二日

松澤宥展 二月四日～

郷土工芸室

現代の萩焼 二月一日～二月二日
現代の陶芸 二月四日～

資料展示室

戦後日本画の変革

二月一日～二月二日

松澤宥展 二月四日～

●第二常設展示室

雲谷派の系譜

二月二九日～二月二五日

雪舟展 二月二九日～二月二〇日

山口県立美術館 ニュース
「天花」 第六七号

平成八年二月一日発行
発行 山口県立美術館

〒753 山口市亀山町三十一

☎〇八三九二二五七七七八

FAX 〇八三九二二五七七九〇

印刷 瞬報社写真印刷株式会社